

地方自治ここにあり 首長インタビュー

# 観光客50万人の町を実現 食文化を活かした観光まちづくりの道は続く

有田郡湯浅町長 上山章善 さん



上山章善湯浅町長

和歌山県内の市町村長を訪ねてまちづくり政策を聞く首長インタビュー。今月は有田郡湯浅町の上山章善町長との対談です。聞き手は当研究所の鈴木裕範理事です。

## 安全安心な まちづくりを掲げて

鈴木：上山町長、昨年の8月の町長選挙では無投票での4選でしたが、ご挨拶が遅くなりましたが、あらためまして、おめでとうございます。

町長：ありがとうございます。

鈴木：2008年9月の選挙で初当選して今年で13年、人口減少、少子高齢化、地方の衰退が進む、大変多難な時代に、地方自治のかじ取りをされてこられたわけで、上山町長が当初から訴えてこられたのが「安心安

全なまちづくり」でした。

町長：すべての事業が、町民が安心して生活できるまちをつくることにつながっていくと思うのですよ。だからどこまでできたかと言われたら、まだできていないものがたくさんあると思いますが、僕の、思っていたことは、大体できつつあると思っています。

住民が安心するというのは何かと考えたときに、湯浅は、地震とか津波に、一番弱いまちと昔から言われている。地震や津波が来ても、役場から助けに行くことはできない。住民自らが逃げて助かってもらう。自分らの力でやる。そんなまちをつくりたい、その手助けができればいいというのが、一番初めの思いでした。防災無線のラジオ全戸配布、それから、高台へ逃げる道路に誘導灯を全部付ける、こんな事業から始めたのです。これは県下でも一番早かったと思います。

鈴木：はい。

町長：夜中でも、夜の暗い道を逃げるときに、この誘導灯の光を頼りに行ってもらおうと

高台へ行けるとか、あるいは放送ですね、屋外からの放送だと聞こえない。そういう苦情ばかりですよ、町民から。だから家の中に居ても緊急の放送が聴ける手立てはないかということ、防災無線のラジオを各戸に無償で配布したのです。今は、放送の苦情は全然なくなりました。

鈴木：私が住む和歌山市の地区でも、聞こえる地域と聞こえない地域があります。

町長：うちのまちはご存じのように、狭い道が多い。だから逃げるのは大変だと思うのですが、もし地震で家が潰れたりしたときに、できるだけ逃げられる広い道、この道を通ってくださいよという広い道の中央に太陽光の電気で発光する誘導灯を付けているのです。それを伝って逃げてくれたら、高台へとかく行くようになります。

僕は教育長をやって副町長をして69歳で町長になりました。1度目の挑戦の時は、落選しました。

教育というのは人だけではない、施設も良くないといかないことをずっと言ってきた。人も環境なら施設も環境やと、環境を良くせんと子どもは良くなっていかなと。僕

### 目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー	
観光客50万人の町を実現	
食文化を活かした観光まちづくりの道は続く	
有田郡湯浅町長 上山 章善さん……	1
和歌山市IR誘致の賛否を問う住民投票条例制定署名運動	
カジ/誘致の是非を問う和歌山市民の会共同代表 堀内 秀雄……	6
新年のご挨拶	
和歌山県地域・自治体問題研究所 大泉 英次理事長……	8

## わかやま住民と自治

発行/和歌山県地域・自治体問題研究所  
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号  
TEL・FAX 073-488-3127  
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2021年12・1月号



普段はホールになる議場

が教育長の頃大変な時代やっ  
た、学校が荒れて。中学校は、  
勉強のできるような状態じゃ  
なかったわけよ。4年間、町  
民として町政を見ていたら、  
施策が進まないという声が町  
内でわいてきて、もう1回、  
出てくれというような意見も  
あって、再度町長選に出た。

1期目はね、69才から始め  
たわけ。一番初めに、防災も  
大変やけども、教育も何とか  
しないといかんと、当時役場  
も学校の校舎もとにかく古か  
った。役場は後でいいが、や  
っぱり学校をやるうというこ  
とで、国の施策を活用したわ  
け。学校を2年の間に全部や  
り替えた。湯浅小学校、湯浅  
中学校を建て替え、あとの学  
校は全部、耐震化工事をやっ  
て、各教室の冷暖房を全部付  
けた。これも県下で一番早か

った。100パーセント、学  
校を冷暖房完備にする。その  
後全国で、学校に冷暖房を付  
けるという声が出てきて、や  
つと、今100パーセント近  
くになったけど、湯浅は今か  
ら10年ぐらいい前にやった。

### 乏しい財源 知恵で資金確保

町長：当時、中国で四川省の  
地震があつて、学校が潰れて  
大勢の子どもが亡くなったと  
いう事件があり、国が学校の  
耐震化を進めようと、各町へ  
3億円ずつ学校施設を直す補  
助金と起債をくれました。

その時、3億円なら1学校  
も出来ない。だから、おそら  
く各町へ行つても、県では残  
つてくると考えたわけ。補正  
予算は、期間が限られるので  
対応出来ないことが多い。う  
ちの学校は、全部直したらど  
れくらいかかるといふ事を教  
育委員会の職員を動員して、  
積算させました。それで大体  
40億円かかる。と。よっしゃ、  
それなら県へ、もらいにいこ  
うと、40億円の申請を出した。  
県は、湯浅町さん幾らそんな  
こと言つても40億円はいけん  
と、県で断られたけども、結  
局は37億円か8億円もらいま

した。他で残つてきたので。  
鈴木：なるほど。

町長：他の自治体がようやら  
んというのをもらったわけ。  
平成7年1月16日、阪神淡路  
の震災があつた、平成7年の  
4月に教育長で県から湯浅に  
戻つてきた。そのときに、県  
へ国から3億円か4億円震災  
対策費としてくれた。けれど  
県下でどこも手をあげるとこ  
ろがなかった。というのは、  
補正予算で10月に予算が来た  
ら、設計、入札をやつて、翌  
年3月31日までに「繰り越  
し」事務をしないといけない。  
湯浅中学校の体育館は、ぼろ  
ぼろで、阪神淡路の地震で、  
もう使える状態ではなかった。  
それを直せということで、た  
またま1500万ほど設計の  
予算がついていた。それが生  
きて、県へきた国の対策費を、  
湯浅町へ全額くれた。

湯浅中学校の体育館は、ほ  
とんど国の補助でできました。  
その体育館も、防災の關係で  
避難所として使えるように、  
備蓄庫など防災用の施設も併  
設した形でつくられたわけです。  
鈴木：なるほど。  
町長：そんな事があつたから  
学校の整備はほとんど補助金  
でできた。町長になつたとき  
に、絶対これで行けると思つ

たのが功を奏した。  
鈴木：学校の数は。

町長：中学校1校、小学校が  
4校と、分校は冷暖房付けた  
だけでしたけど。5校一遍に  
やつた。  
鈴木：まず子どもたちの学び  
の環境を整えることが大事だ  
と考えたわけですね。  
町長：とにかく教育が良くな  
らんことには湯浅町は良くな  
らんと思ひました。

### 上山町政の原点は教育

鈴木：上山町長の、政治の原  
点はまず教育。

町長：そうですね。教育施設を  
ちゃんとしたら、避難所とし  
ても使える。子どもが安心す  
ると同時に町民も安心してそ  
こへ避難をすることができ  
る。そういう考え方で僕は教育施  
設の整備を、教育委員会中心  
にやらしたのやけどね。

鈴木：学校はコミュニティの  
拠点です、万が一の場合に、  
防災の拠点になると。  
町長：はい。それから、ここ  
の役場や消防は津波が来たら  
浸水する場所にあつた。役場  
が、海抜4メートルそこそこ  
で災害が来たときに活動する  
ことができない。だから何  
とか高台へ移転をしたいと思

つて、ちようど、それも緊防  
債という地方債を借りられる  
ようになった。その緊防債は  
7割を交付税措置してくれる  
ということ、3割でできる。  
建物がね。ちようど合致した  
ので、いろいろもめながらや  
けども、役場も消防もこの高  
台へ移すことができた。老人  
ホームの施設もそう、今年か  
ら、こども園をね、保育所を  
1か所にまとめて高台へ移し  
た。すべての施設が避難所を  
兼ねた公共施設ということで、  
全部、避難所にできるように  
したのです。だからこの役  
場は専用の議場というものが  
ないのです。

鈴木：そうですね。  
町長：役場とか市役所は、議  
場がものすごく立派なのです。  
鈴木：そうですね。  
町長：うちにはそんな議場は  
ない。議会で議会軽視やと問  
題になりましたけども。僕は、  
議場は1年間にどれだけ使う  
のですかと議員さんに言った  
のですよ。本議会というのは  
4回しかないと、1回の議会  
で3日使つたとしても、12日  
しか使わない。だから、住民  
のために議場を有効活用でき  
るように、議会のときは議場  
になりませんが、平生はホール  
として、避難所や催し会場と



醤油醸造の町、伝統的建造物群保存地区

して使える。住民に開放した方が議会としてもいいのではというところで、議会と大分やりとりはあったのですが、役場の3階をホールにしたのです。

鈴木：うーん、なるほど。  
町長：議場はないのです。

### 海辺のまちが見つめる

#### 災害対策

鈴木：南海トラフなど近い将来予測される巨大災害への、安全対策にこれでもいい、はありません。

町長：湯浅のまちというのは、まちそのものが大変古い、建物も古い。地震なんか来たらほとんど皆、潰れてしまうと思うようなまち。それを行政で、個人の家までつくるわけにいかない。そこへ持ってきて

て、防災の施設といえども、幾ら堤防なんかを強化しても、地震、津波の時には、堤防で自然を相手に守ることはできないと思うのですよ。だから、住民が災害のときには自分で逃げてもらう、自分で何とかしてもらおうことが大事やと思っているので、町内では防災の自主防災組織をつくっていいこと、今その組織づくりを一生懸命やっているのですけれど。

鈴木：自主防災組織は各町内に整っているのですか。

町長：もうほとんどできてきたんかな。まちの中はね、なかなかお年寄りが多いのでね。

鈴木：ただ自主防災組織をつくっても、年に1、2回行われるような、自主防災会の訓練では心もとない。住民の防災に対する意識の向上が極めて大事になる。そして、地域の中で支え合い、つながり合っ

て、地域で命を守っていくような、そういうコミュニティ力の強化が大事だと思えます。

町長：そうね。それが一番大事やと思いますね。うちの場合でも言われているのですが、隣の人を助けることができるのか。高齢者がとにかくまちの中に多いので、高齢者が高

齢者を助けるというのは大変だと思いのです。

鈴木：そうですね。

町長：できるだけ隣近所で助け合いながら逃げてもらう。意識を高めるにしても、高齢者は、もうどうでもいいというような考え方の人が多

い。後期高齢化が進んでくる。僕自身も82才やからね。

鈴木：ああ、はい。

町長：まちの中で、そういう人がだんだん増えてきているわけよ。今動ける人は何とか隣近所助けながらいいこということで、話し合いもしているのですけどね、なかなか思うようにいきません。

鈴木：悩ましい問題です。

町長：そうそう。

鈴木：住民自治のあり方が問われています。

住民の健康、医療をどう守るか、コロナ禍の教訓でもあります。

町長：うちのまちは、大きい医療機関はないが、医院が大変多い。医師会についても、いろんな形で行政と一緒に協力してやってもらっている。

今度のコロナ対策のワクチンの接種についても、各医療機関でも接種してもらおうとともに、土曜日曜、役場のホールを使って集団接種をやっても

らう。お医者さんが少ない隣の広川町の町長にも話をし

て、湯浅と広川町合同で集団接種を、役場のホール、議場で行いました。ワクチン接種

は、湯浅町も広川町も、90パーセント近く済みますことできました。接種率は県下でも高い方

やと思うのです。医師会とも協力してやっていきたいと思っています。開業医も高齢にな

ってきまますので、後継者を育てる必要があると思うので

すが、今のところ医療機関は充実していると思っています。

鈴木：医療体制は一応整っているというお話ですね。

### 「田村みかん」をモデルに

鈴木：暮らしを支える地域経済の振興策ですが。

町長：経済状況は、厳しくなる一方やと僕は思っているのです。今はコロナの問題でどこでも厳しいと思います。今

まで言ったように、高齢化が進んでいく、それで営業にならんから若い人が残らない。こういう状況が続いていくと

思う。これを、今止めるっていうことはなかなかできない。

今の湯浅の経済の状況をどこまで維持できるのかが、それは、大変厳しいものがあります。

鈴木：湯浅の地域経済を長く支えてきた農業、漁業さらに醸造をはじめとする、製造関係も課題があります。そうした中で、上山町政のもとで観光にウエイトを置いたまちづくりに取り組んでこられました。

重伝建（重要伝統的建造物群保存地区）、歴史的風致維持向上計画の作成、日本遺産の登録、食のまちなどです。歴史遺産と湯浅の自然風土、

その中で育まれる食文化を活かした、観光のまちづくりですね。違いますか。

町長：そのとおりやと思います。一次産業ではミカン農家が相当多いわけで、ミカンもいろいろの問題はありますけども、ミカンはほうぼうにあるから特殊化していく必要がある、やっぱりブランド化する。田地区の田村みかんはブランド化されて、値段もびっ

くりするほどで、地元の間人が食べられんような値段が付いている。その地域は、後継者も育っているのですよ。

ただ、ほかの地域のミカンは心配しています。何とかせん

なんと思っています。

もちろん湯浅は醤油発祥の地ということで、大分いろんな仕掛けをやってきました。



安政南海地震 (1854年)  
大地震津波心得の碑

ここ数年間、地方創生という補助金を使って、東京や大阪で湯浅のまちの名前を売り出す、イベントもいろいろやってきたので、名前が売れて、ふるさと納税につながっていると思うのです。まあ、そのおかげで、「湯浅えき蔵」とか、そのほかのいろんなハーブ事業ができてきていると思う。今まで赤字だった町の財政も、約30億近い基金を持つことができた。だからここ数年はこれで行けると思っているのですよ。

**鈴木：**頂いた、ふるさと納税の湯浅町の返礼品カタログをみると、湯浅が「和食のふるさと」と呼ばれることに、あらためて納得します。

**町長：**味噌、醤油は、古いつくり方で昔からやられてきている食品ですので、これはやっぱり伝統的に守っていくべきだと思っています。

**鈴木：**小さいことを利点に変え、キラリと輝く、経営をさ

れている事業者がいます。後継者は大丈夫なのか、伝統的な地域産業に対する支援策は、どうなのですか。

**町長：**特定の店を支援するというやり方はやってないですけども、商品はできるだけ町の方でPRして、販売路を広げていくとか、そういうことについては、ふるさと納税も含めてそうですけども、京阪神、あるいは東京へ向けて発信をする、発信の作業については町の方で今までもやってきたし、これからもやっぱりやっていかんなんというふうに思います。

**鈴木：**なるほど。

**町長：**後継者の問題については、うちは後継者がいないからという相談は受けてないですけども、心配は心配なんです。かろうじて後継者を自分らでつくって続けているという状況が見受けられます。この間も1軒の金山寺味噌屋さんの御主人が亡くなりました。実は僕の友人でね、金山寺味噌屋はもう僕で終わりと行ってたのでね。それで、そんなこと言わんと誰かにやってもらったらという話までしていたのですよ。その娘さんに、いい縁談の話が出てね、まあ辛うじて後継ぎができた。ま

### 食文化を活かし 観光まちづくり

れなことですけども、うまく後継ぎができて、ちょっと一安心した。数からいくと味噌の製造者、醤油の製造者ってごく少ないのですよ。それをつなげるということでは、相談をしながら、やっていきたくて思っています。新たな後継者を他から求めるのは求めにくいと思いますね。

**鈴木：**歴史のある湯浅の発酵文化、醸造産業ですから、育て、守り続けていく必要があります。ところで、上山町長が推進してきた、食文化のまちづくりの核になる重伝建の北町を中心とした町並みの整備ですが、修復は、ほぼ終わったと見てよろしいのですか。

**町長：**いや、町並みの修復は、1年に2軒か3軒なので、せいぜいやれて。これは、国や県の予算の問題もあるし、申請を出してもなかなか補助金ももらえない状況があるのでね、町でもある程度の補助金を出しているが、なかなか難しい。あれだけの地域の家を修復するのは、時間がかかる。直していくところが多く出てくると思います。とにかく

文化財的に言うと、古い状態に残さないかん、ところが住んでいる人は、古いままでは我慢できない。そういう葛藤が難しいところなんです。そこへ持ってきて、町が勝手に家を直すわけにはいかん。一部負担があるから、お金の

ある人は直そうと言うけども、お金のない家なら、わしが死んだら終わりやから、このままでいいと直してくれない家が多い。だから、修復が終わったと言えるのはどの時点かなと思っっているのです。まだまだかかると思います。

**鈴木：**まちの魅力をもっと上げていくには時間があるということですね。空き家バンクは、どうですか。

**町長：**空き家バンクは難しいのですね、なかなか湯浅の人は家を貸しながらののですよ。空き家をうまく使いたいと思うのだけど、なかなか話がうまく合わない。

**鈴木：**千山庵という空き家を活用した宿泊施設もあります。

**町長：**そうですね。

**鈴木：**地域のコミュニティ力はどうでしょう。

**町長：**北町の通りが東西にあり、他に南北にも何本か通りにまちがあつて、それぞれ自治会が違う。その全てのコミ

ュニティがうまくいつているのかというと、そうでもない。今のところ重伝建のまちは、観光客が来たら喜んでくれる家が多くなつてきている。何とか修復しようとしてきている家も多くなつてきている状況です。

**鈴木：**コロナ禍の中で全国的には人間関係の希薄化、分断が言われたりしますが、湯浅は歴史のあるまち、古くから住んでいる人たちが多くいわけで、親しい関係性があるので、は。

**町長：**そのとおりと違うのかな。まちのコミュニティは割と取れていると思っっている。

**鈴木：**湯浅の年間の観光客はいま、どれくらいですか。

**町長：**コロナの前までは、50万人ほど来ていた。元年ぐらいは、一遍に増えたと言っっていたのに、コロナになつてからばたつと止まつてね、今ようやく20万ぐらいいままで戻ってきました。

**鈴木：**上山町長が町長になられて間もない頃は、まだ20万人台で、何とかこの40万くらいに言われていました。

**町長：**そう、倍にしたいなどいうことですね。

**鈴木：**当初の見込みを上回る数です。醤油のまち湯浅は、

